HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	日本野球の聖地：大連と嘉義
著者	澤野，雅彦；Sawano，Masahiko
引用	北海学園大学経営論集，15(1)：1-10
発行日	2017-06-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

日本野球の聖地

── 大連と嘉義[1) ──

澤　野　雅　彦

はじめに

台湾で「KANO」という映画が大流行している。2014年2月に封切られて，わずか1ヶ月で2億台湾ドル（約6億7千万円）の興行収入を上げ，大ヒットとなっているという〔日本経済新聞2014年4月6日〕。これは，1931(昭和6)年，台湾代表の嘉義農林学校が，第17回全国中等学校優勝野球大会（いわゆる夏の甲子園大会）において，並み居る強豪を次々撃破して決勝に進み，愛知代表・中京商業に敗れたものの，外地の学校としては5年前の大連商業（満州代表）に続き，準優勝した実話を下敷きにしている。

松山商業の監督を経験した近藤兵太郎が，蛮人（原住民）漢人（中国人）日本人の混成チームを率いて，それまで台湾代表を独占していた，台北一中，台北商業など日本人ばかりで形成された台北勢を破り，甲子園に出場して大活躍する物語である。「混成チームに何ができる」という揶揄に対して，近藤兵太郎が，「蛮人は足が速い，漢人は打撃が強い，日本人は守備に長けている。こんな理想的なチームはどこにもない。」といい放つシーンが映画のモチーフになっている。

この映画をきっかけにして，嘉義市と近藤兵太郎の出身地である松山市および愛媛県は交流を始め，今では松山市は，台湾野球の聖地となって，巡礼者が後を絶たないという。そして，航空会社（チャイナエアライン）は，台北の松山空港から四国の松山空港にチャーター便まで飛ばし始めている。

別に，映画のコンセプトに文句をいうつもりはないが，戦前の日本においては，人種混成のチームなど，珍しいことではなかった。宗主国の特権とか，植民地主義などといえばそれまでのことだが，国籍がどうのといい出すのは，むしろ戦後になってからのことである。例えば，国民体育大会などで，日本国籍がないと大会に出場できない，というようなトラブルが起こるようになるのは戦後なのであり，その点戦前は，ずっと大らかであった。

例えば，都市対抗野球において，第1回大会から第3回大会まで，大連市が優勝していることを，多くの人は忘れている。南満州鉄道従業者が中心の満州倶楽部が第1回と第3回，クラブチームの大連実業団が第2回に優勝しており，その後も，満州倶楽部が2回，大連実業団は1回準優勝した。大連市は都市

1）本論文は，2008年度からの2年間，国立民族学博物館において行われた研究プロジェクト「聖空間の経営人類学的研究」の総括として計画され，2014年に出版予定だった日置弘一郎・中牧弘允編「聖空間の経営人類学」（仮題）の1章として掲載するために2014年5月頃書かれた原稿である。その後，諸般の事情で出版が遅れ，さらに最終的には出版計画自体が頓挫したため，宙に浮いた原稿を掲載したものである。そのため，記述が古くなり，前後関係がおかしな箇所などもあるが，今回はとりあえず，書き直すことはせずそのまま掲載することにした。

対抗野球最強チームとして君臨していたのである。そして，この中には，少なからず，非日本人も含まれていた。また，同大会では，朝鮮代表・全京城（京城市）が，2 回の優勝と 2 回の準優勝を記録し，台湾代表・台北交通団もベスト 4 に進出した記録がある。そこでも，人種混合チームが活躍したことがある。

さらに，甲子園には，微文高普（フィムン高等普通中学）という学校が出場しているが，これは，朝鮮人だけのチームであった。大島裕史 2006 によると，2 回戦から登場し，満州代表・大連商業を 9 対 4 で下し，準々決勝では，京都代表・立命館中学に 5 対 7 で敗れたものの，闘志あふれるプレーは，日本の中等学校野球ファンに強い印象を残したという〔12-13 ページ〕。

文明接触とスポーツ

「ある一定地域の人間集団の生活のあり方を一つの球（これを『生活圏』と名づける）で表現することとする。その球の内部の芯には，その人間生活を行わせているその集団特有の『エートス・観念形態・価値感情』というものがある。この生活圏の内核を文化としよう。文明はこの文化によってつくり出され運用される，その生活圏に必要な『制度・組織・装置』であり，これが球の外殻を形成する〔伊藤俊太郎編 1997 世界思想社〕」。

この思考に従って，スポーツを考えてみよう。スポーツは，この球の最も外殻側に存在する，文明の装置である。つまり，人間の集団生活を豊かにする「遊び」の一種であるが，ルールによって仕切られ，どこへ行っても誰がプレーしても，同じように楽しむことができるという意味で，文化的要素は含まれない。もちろん，どうルールを解釈するか，どのようなプレーが賞賛されるかなどに，文化（価値感情）の要素は含まれてくる。そこに，スポーツ文化論が成立する契機はあるが，スポーツのしくみ自体は，典型的文明の要素といえる。

スポーツは，ルールによって仕切られ，ルールは通常プレーを見るだけで理解できることが多い。もちろん，高度な連係プレーなどを理解するには言語も必要になるが，相当程度ボディアクションなどでコミュニケーションは可能である。そのため，他の文明要素に比べて，文明接触による伝播も早い。たとえば，イギリスでは，上流階級はラグビーやクリケット，中流以下ではサッカーなどが人気のあるスポーツであるが，植民地，つまり統治官として上流階級が多く移住した地域では，ラグビー（オーストラリア・ニュージーランド・南アフリカなど），クリケット（インド・パキスタンなど）が人気である。

一方，船員たちが，世界じゅうの港に入港するたびにサッカーをプレーして，現地の人たちにこれを伝えていったことが知られている。そのため，サッカーは，南米やアフリカにおいて，最も盛んなスポーツとなっている。

日本の場合，海外に進出するたびに，バットとボールを持参した。台湾，朝鮮，満州（現在では問題がある呼び方であるが，本稿では歴史的文脈として当時の一般的呼称を用いる）と，それぞれ進出の方法は異なるものの，常に野球を持参し盛んにプレーした。この，19 世紀末から 20 世紀初頭は，少しずつ日本に定着していた外来スポーツ，特に野球が盛んになり，全国に普及した時期に当たる。それまで，一高や東大（駒場農学校や工部大学校），新橋倶楽部（アメリカに留学した鉄道技師・平岡熙が作ったチーム）などのエリートたちに限られていた野球チームが，少しずつ大衆へと普及し始めるのである。19 世紀末には東京や関西を中心に続々と大学野球チームが誕生し，第 1 回早慶戦は 1903 年に行われている。そして，1915 年には全国中等学校優勝野球大会が 1927 年には都市対抗野球が誕生し，1936 年には職業野球が成立して

いる。

当時外地に入植した人たちは，仕事が終わるとすることもなく，最大の娯楽として野球を楽しむことになる。そして，現地の人たちを巻き込んで盛んに野球を行った。新規の植民地・領土等を統治するためには，インフラ整備が必要になるから，まず，最初に入植するのは鉄道従事者である。そのため，南満州鉄道（満州・大連市）・竜山鉄道局（朝鮮・京城市）・台北交通団（台湾・台北市）などで盛んに野球が行われる。むしろ，外地への入植者を募るためには，このような職場が魅力的であることを宣伝せねばならず，南満州鉄道のように，野球などの活動に力を入れ，野球ができることを謳い文句とするところさえあった〔小林完一編 1969〕。

日本本土の場合，既に述べたように，外来スポーツは，大学・専門学校・師範学校などから始まり，卒業生たちがプレーを続けるために社会人チームを作る。同時に，教員となった卒業生たちが，中等学校（中学・高校）で教えるので，大衆へと普及するというプロセスをたどることが多かったが，外地の場合，社会人からスタートする。戦前の都市対抗野球で，外地のチームが大活躍するのはこのためである。

さらに，ここで活躍した選手たちが，中等学校などを指導することにより，中等学校野球優勝大会でも勝ち進むチームが現れ，甲子園でも活躍が目立つようになる。このような文脈で，大連商業や嘉義農林を考える必要がある。

日本野球の伝播

野球は，もちろんアメリカから日本にもたらされた。その原型はイギリスで行われたタウンボールといわれているが，19 世紀中葉までにアメリカでその骨格が出来上がり，南北戦争を通じてアメリカ全土に拡がっていった。そして，19 世紀末には組織化が進行し，プロ野球（MBL）も成立する。日本にもたらされたのは，1872 年ホーレス・ウイルソンによってとされている〔例えば，坂上康博 2001：12 ページ参照〕。

日本では，主に学生によってプレーされ，最初に現れた強豪チームが一高であった。そのため，野球は教育論争に巻き込まれることになり，結果的には，武士道と混淆して「一高野球」が形成されるのである。ただ活発愉快な運動術ではなく，精神修養に価値基準を定め，武術と同等の地位に登り詰めるのである〔坂上康博 2001，88 ページ〕。そして，この「一高野球」が，良くも悪しくもその後の日本野球を方向付けたのである。

2013 年 3 月 8 日に行われた WBC 第 2 ラウンドにおいて，日本と台湾は激闘を展開し，日本が辛くも勝った。敗れた台湾は，マウンドの周囲に集まり，スタンドに向かって深々と一礼するという行為を行ったのであるが，その後，ニュースなどでも取り上げられ，大きな話題となった。これなど，日本野球伝播の痕跡といえるかも知れない。

確かに，20 世紀初頭，日本野球は朝鮮・満州・台湾へと伝播した。しかし，その受け止め方は，それぞれ異なり，また，その遺産などもさまざまである。まず，それぞれについて概観しよう。

朝鮮半島では，野球が伝わるのは，1905 年アメリカ人宣教師によってあった。ちょうどその年，日本が大韓帝国の外交権を奪い，さらに 5 年後には日韓併合が行われている。つまり，野球は，アメリカから伝わるものの，その発展には日本の影響が大きかったということである。日韓併合以降は，日本人に対する反発は根強く，特に皇民化政策が浸透し，その後創氏改名が行われると，反発は最高潮に達することになる。

とはいえ，朝鮮半島では，既にサッカーが根付いており，サッカーでは日本人は全く歯

が立たない状況であった。続々入植する日本人は，当然のこととして野球をプレーするが，少しずつ野球をする人が増えてくると，野球で日本人を打ち負かすことが最大の目標となって行くのである。日本は，日本流の学制を持ち込み，日本と同じ中学校（5 年制，例えば京城中や平壌中）を設立するが，以前からの中等学校（4 年制のちに 5 年制・高等普通学校）も残存させた。そして，高普へは日本人は進学しなかったため，先に述べた微文高普の甲子園出場は，溜飲を下げる事件となったのである。

すでに甲子園は，朝鮮の球児たちにもあこがれの場所となっていたが，帝国大学や早慶など，日本の名門大学を卒業することは，ステータスであり，野球がうまければ入学できる早慶など，東京六大学や関西六大学なども，バイパスとして機能した。そのようなこともあり，また，強制的に移住させられた家族の子弟たちも含めて，日本の中等学校や大学などでプレーするケースは多く，さらに戦後は，いわゆる在日の子弟たちで，日本野球で活躍する選手も多く，プロ野球で名選手と讃えられた人も少なくない。

そして，朝鮮戦争を契機に，駐在する米軍の影響を受け，日本野球とは相当の距離を置くが，一方では，在日選手の方がレベルが高かったため，在日選抜チームの遠征などを通じて，日本の影響も残しながら現在に到っている〔以上大島裕史 2006 参照〕。

日本野球の聖地・大連

日露戦争の結果，ロシアは中国東北三省（遼寧省・吉林省・黒竜江省…日本では満族が多く住むこの地域を満州と呼んだ）地域に敷設した南満州鉄道（以下満鉄と略記…旧東清鉄道）と，その周辺租借地を日本に割譲した。この地域に入植する日本人は，娯楽が少なかったこともあり，盛んに野球を行った。たちまち野球は当地の人気スポーツとなり，満鉄では福利厚生のため，また，入植者の募集という意味でも野球を奨励した。

そのため，六大学の名選手などが，しばしば満鉄に就職し，その後指導者として活躍したので，満鉄の本社があった大連の野球レベルは上がっていった。そして，都市対抗野球における大連 3 連覇は，強豪にクラブチームが多い内地に対して，同じ釜の飯を食う企業・実業団チームの方が練習量やチームワークで上回るということを示し，内地に企業チームを増加させるきっかけを作った。ひいては，日本におけるプロ野球（職業野球）の成立にまで影響を与えているといわれている〔澤野雅彦 2004 参照〕。

このようにして，大連は戦前における東アジアで，最も野球の盛んな都市のひとつとなった。戦後のプロ野球再興期を中心に，大連出身の選手やコーチも多く活躍している。阪神タイガースの初代四番打者で，後に監督も務めた松木謙治郎は，大連実業団出身，松木引退の後を受けて監督を務めた岸一郎は，満鉄の出身であった。

大連ばかりではなく，満州の日本人が多く住む都市はすべて野球が盛んで，戦前を通じて都市対抗野球には，奉天市（現瀋陽市，満鉄倶楽部），新京市（現長春市，新京電電・新京満州国），鞍山市（昭和製鋼），撫順市（満鉄倶楽部）が出場し活躍している。さらには，日中戦争で進出した地域であれば，中国本土でも，日本人が多ければ野球チームがあり，1942（昭和 18）年，戦局悪化のため中止された大会では，中国代表も招待されていた。予選の結果，上海華中鉄道の出場が決まっていたほどである。

さて，大連の野球は，その後どうなっていったであろうか。筆者は，2008 年 2 度にわたって調査に出向き，大連野球連盟（当時の副会長・加藤諭氏），大連棒球協会（主席・任挙一氏）と面談し，また，そこで紹介を受け

た人たちと面談した〔詳細は澤野雅彦 2008 参照〕。以下，内容を要約すると，以下の通りである。結論からいえば，残念ながら現在では，その痕跡はほとんど残っていない。

野球を楽しんでいる人たちという意味では，大連野球連盟という春秋にリーグ戦を行っている組織がある。しかし，韓国人のチームや，中国人のチームもあるが，日本人が中心になって運営されており，これにアメリカ人やカナダ人も加わっているものである。しかし，試合をする場所にさえ不自由している状況という。

満鉄や大連実業団が活躍した時代には，大連に野球場は 2 つあった。満鉄の球場と，大連市の球場である。しかし，前者は閉鎖され，後者は「労働公園野球場」として使用されたが，近年閉鎖された。大連野球連盟は，金州区の野球ができる場所に移ったが，そこも閉鎖され，大連大学が野球場を建設するという話はあるが，進捗していないという状況でヒアリングに行った。2 度目に赴いた時には，女子ソフトボールチームの練習場が旅順区にあったが，移転するので整地して野球場にして良いということになり，漸く試合場所を確保したということであった。

1945 年敗戦により日本は引き上げたが，その後も野球の根は残った。日本人と一緒に野球をしていた人はたくさんいたし，引き上げに際して残していった道具も一杯あった。任主席によると，大連造船所や金州紡績所が，チームを作っていた。1959 年には，第 1 回の全国棒球大会が開催され，当時中学生だった同主席もピッチャーとして参加した。優勝は上海で，大連も，まだそこそこ強かったので，16 チーム中 5 位となったという。

その時のチームのエース・ピッチャーだった馬家新氏が，まだご存命と聞いて会いに行った。83 歳になる同氏は，かくしゃくとして卓球に興じられていた。同氏は，金州出身で，金州には日本人は少なかったので，日本人と一緒に野球をした経験はないという。まだ，子供だったが，大連で満鉄などの試合がある時によく見に行ったとのことであった。1959 年の大会では，14 チーム参加で 6 位，優勝は天津と，任主席と異なる話があった。ウキペディアで「中国野球」を検索すると，「1959 年の第 1 回全国運動会では，30 以上の省・市のチームが優勝を争った。」との既述がある。今となっては，どれが本当か，分からない。ともかく，馬氏の話によれば，日本人と一緒に野球をプレーした人は，もうみんな亡くなっているのではないか，とのことである。

とにかく，この頃には道具が不足し，靴を加工してグローブにしていたという話もあった。しかし，この大会が最後で，1960～1974 年は，中国全体で野球やソフトボールは中断された。1960 年には，自然災害が起こり，国民の生活は困窮した。野球は贅沢と見なされるようになり，そこへ，1966 年文化大革命が起こった。野球は，敵性スポーツと見なされたので，やる人もいなくなった［以上，任主席の談話］。

復活するのは，1975 年からで，ここでも，日本人が大きな役割を果たしている。日中貿易が再開して，大連港に入港する日本人船員たちが，野球をするようになり，任主席も，中学教師として，野球の指導を始めた。その後，野球がオリンピック種目になったことを追い風に，1985 年，国家チームが編成され，中国でも，少しずつ野球が復活し，中学・高校の全国大会も開かれるようになった。そして，大連の中学・高校チームは活躍し，任氏も，1986～98 年，中国棒球協会副主席を務めたという。

周知の通り，その後，野球はオリンピックから除外され，折角できた中国のプロリーグも解散して，現在に到っている。加藤氏とも話し合ったが，「キャプテン翼」のような野球マンガが，大流行するか，全米バスケット

ボールリーグ（NBL）で活躍した兆明選手のように，アメリカ MBL や日本のプロ野球で，中国出身の選手がスーパースターとなって大活躍するほかに，中国に野球を普及させる方法は，ないのではないかと考えられる。

日本野球の聖地・嘉義

嘉義市の郊外にある嘉義市立野球場の前には，「威震甲子園」というプレートの入ったバットの像が立っている。また，台南州立嘉義農林学校の後進にあたる国立嘉義大学の校庭には，朝日新聞社が贈った準優勝額のレプリカと，「天下の嘉農」の文字が入った野球ボールの像が屹立している。嘉義市内には，多くの日本野球の痕跡が今でも残っている。

台湾は，オランダの植民地，清朝統治の時代を経て，日清戦争後の下関条約によって，1895 年に大日本帝国に割譲された。オランダや清国は，既に開けていた台南や台北を起点として支配したに過ぎず，中南部とくに山岳地帯が，本格的に開発されたのは，日本が統治してからである。1898 年，第 4 代台湾総督に就任した児玉源太郎が，内務官僚だった後藤新平を民政長官に起用してから，中南部の本格的開発が始まる。国土の 3 分の 2 が山岳地帯である地形を利して林業を興し，自生するサトウキビを利用した製糖事業のため国策会社・台湾製糖（台糖）を設立し，台南に工場を建設した。そして，木材やさとうきびの集散地にあたる嘉義から台南へ鉄道を引いた。

さらに，現在でも台湾屈指のリゾート地である阿里山系へ鉄道を延伸して材木を運ぶとともに，嘉義から南に拡がる嘉南平野一帯に灌漑設備を施して，農作地帯としての発展を促すのであるが，嘉義農林学校は，このような文脈で設立される。ここで活躍するのが，映画にも登場する，東京帝大出身の土木技師・八田彌一である。彼の献策による，烏山頭ダムを含む嘉南大圳（大規模な農業用水）が完成すると，嘉義は，台湾南部地域の中心都市へと変貌していくのであるが，この計画のため，多くの日本人技師や技能者が入植し，その子弟たちが，嘉義農林の日本人選手の中心となっている。なお，八田彌一は台湾の農民たちから尊敬を集め，戦後烏山頭ダムの近くに銅像が建てられている。

嘉義に限らず，内陸部には，もともと原住民が多く住んでおり，彼らは「生蛮」と呼ばれていた。冒頭の「蛮人」は，ここから来ており，1923 年に裕仁親王（のちの昭和天皇）が「それでは，あまりに気の毒だ」といわれたことから，「高砂族」と改称され〔例えば加藤英明 2013，21 ページ〕，一般的に用いられ始めるのは 1935 年頃からとされているので，映画の 1931 年当時には，まだ高砂族の呼称すら浸透していなかった。現在，台湾政府によって，14 の原住民族が承認されているが，日本ではこれらを一括して高砂族などと呼んでいたのである。

嘉義農林の甲子園での活躍は，このような状況を背景に，松山商業から情熱を持った優秀な監督の赴任と「3 民族の融合」で，実現する。この時のエースで 4 番・呉明捷選手は，客家人つまり，清国時代に広東から入植した人たちの末裔である。台湾大会ではノーヒット・ノーランも演じ，甲子園でも活躍する。卒業後は早稲田大学で活躍するが，投手ではなく，一塁手・四番打者として早慶戦でサヨナラ・ホームランを放つなど人気を博し，六大学のスターになったが，プロには進まなかった。

プロで活躍するのは，2 年後の 1933 年から近藤兵太郎監督の下，夏 3 回，春 1 回甲子園に出場した呉昌征（登録名・ごまさゆき，帰化後の日本名：石井昌征，中国名：呉波）である。彼は，草創期のプロ野球で巨人に入団，その後，阪神，毎日と転じ，「人間機関車」の異名を取って何度も首位打者や盗塁王になった名選手で，殿堂入りも果たしている。

筆者は，2度野球の調査で台湾を訪問しているが，2012年の最初の時，どなたか野球関係の方を紹介して欲しいと依頼して紹介されたのが，嘉義農林およびその後の嘉義大学野球部OB会長・蔡武璋氏であった。甲子園で準優勝した嘉義農林や，その出身者で，日本のプロ野球で活躍した呉昌征氏のことを調べているといった時，大喜びされて，アルバムや資料を見せていただき，いろいろな話を伺った。ちょうど，甲子園準優勝の映画を作るために募金で奔走しているということであった。そして，最後に「人間機関車・呉昌征」と題する中国語の本をプレゼントされた。これは，著者の岡本博志氏がネットに流されているので，日本語でも読むことができる(http://p.booklog.jp/book/16489)。

そして，この映画「KANO」が台湾で公開された2014年3月に2度目の訪問を果たした。今回は，国立嘉義大学からの招待であったが，ちょうど行われた，映画監督の馬志翔氏，1931年当時の飛ばないボールで，アジア人として初めて甲子園のフェンス直撃の打球を打ったとされる好打者，蘇正生を演じた陳勁宏氏(嘉義大学野球部の現役学生)，さらには蔡武璋氏などを招いた記念式典に出席することもできた。

さて，映画に呉波は，嘉義農林にあこがれ，練習場に出入りする少年として描かれているが，これは史実に反するようである。岡本博志によると，呉波の生い立ちは以下の通りである。

「呉昌征は大正5(1916)年8月26日，工場に隣接する台湾製糖の社宅で生まれた。5男2女の次男だった。父親呉福は役人をしていた台北から郷里である台南に帰って，台湾製糖橋仔頭工場の現場監督者として転職していた。呉少年にとって，野球を自由に楽しめる環境に恵まれたことが幸運だった。

台糖は，社員とその家族のためにスポーツ施設をつくり，スポーツ特に野球に力を入れた。広大な敷地に社宅群があり，社員の厚生施設である台糖クラブ，硬式テニスコート，台北に次いで二番目の野球場を持っていた。社員の子供たちはどこにでもある広場で野球を楽しんでいたが，チームの人数がそろうと，野球場で試合をする機会を与えられた。台糖は社員の家族のためだけではなく，地域のスポーツ振興に力を入れ，用具を購入して支援していた。橋仔頭は全体が台糖の地域社会であった。」

ここでは，「社宅」と「スポーツ施設」に注目していただきたい。満鉄などでも同じであるが，企業の福利厚生制度は，外地が先行する。不自由なところで働き手を確保する要請が強かったためであろう。また，企業スポーツは，19世紀末に，いわゆる第2次産業革命が起こり，それまでの請負や派遣を中心にした間接雇用から，直接雇用に切り替わる時期に，福利厚生策の1つとして成立する。このため，この動きが早かったドイツやアメリカでは，19世紀末に，各種の福利厚生策が競って大企業に導入され，企業スポーツも産声を上げている。諸般の事情もあり，両国ではその後，消えていくのであるが〔例えば澤野雅彦2014参照〕，この時期にドイツへ留学した，後藤新平の影響が大きいのかも知れない。

後藤新平は，台湾の民政長官のあと，1906(明治39)年満鉄初代社長に転じ，さらには1908(明治41)年初代内閣鉄道院総裁となっている。日本で，最初に野球チームを作った企業は，北海道の札幌鉄道局といわれており，初期の社会人野球は，全国の鉄道局がリードした。退任した後とはいえ，後藤新平の歩んだ道で，企業スポーツが盛んになるのは，興味深い現象である。

ともあれ，呉昌征は，台糖のグラウンドで育ち，1年浪人してあこがれの嘉義農林に入学し，近藤兵太郎の薫陶を受けて甲子園で活躍した後，プロ野球に身を投じ，草創期の巨人をリードオフマンとして牽引し，その後阪

神へと移った。

岡本博志は，「私が終戦後間もなく小学校に入った頃は，阪神タイガースの黄金時代であり，呉昌征は外野手，トップバッターとして活躍していた。当時，タイガースの一番から五番までの打順は呉昌征，金田正泰，別当薫，藤村富美男，土井垣武だった。70 歳以上の世代なら，このダイナマイト打線と呼ばれた選手たちの名前を懐かしく思い出すだろう。彼らはメンコとブロマイドのスター選手だった。」と書いているが，筆者は，それより少し下の世代なので，この選手たちを見たことがない。しかし，子供の頃からの熱狂的な阪神ファンで，小山正明，村山実，渡辺省三，ジーン・バッキーと並ぶ好投手，三宅秀史・吉田義男・鎌田実と並ぶ，守備練習だけでお金が取れるといわれた華麗な守備陣を擁しながら，ほとんど点を取れない打撃陣のため，勝つ時も負ける時も，いつも 1―0，1―2 という様子を見て，ダイナマイト打線の選手たちがいてくれたらなあと，いつも思っていたものである。

だから，呉昌征の名前は小学生の頃からよく知っていた。2 リーグ分裂に際して，若林忠志監督兼エース，別当，土井垣らとともに，新設の毎日オリオンズへ移籍して，阪神が一遍に弱くなったことも，繰り返し読んできたことであった。また，嘉義農林出身であり，嘉義農林が甲子園で準優勝したことがあることも知っていたが，その詳細に接したのは，今回が初めてである。

日本ハムの大谷投手が投打両刀遣いということで，話題を集めているが，呉昌征も打者の他に投手としても足跡を残している。戦中戦後の選手不足の時期とはいえ，1946（昭和 21）年には，投手として 27 試合に登板し 14 勝 6 敗，投げない時は中堅手として，ほとんどの試合で一番打者を務め，2 割 9 分 1 厘という投打素晴らしい記録がある。年度によって好不調が激しく，怪我でもないのに定位置を奪われたような年もあるが，実働 20 年 1700 試合に出場し，1326 安打，381 盗塁，そして，投手としての通算 15 勝 7 敗を加え，殿堂入りに相応しい記録を残している。

都市対抗野球の記録を見ると，当初は，台北交通団が出場を独占し，その後，全台北市が一度出場した後，後半は台南州団と高雄市団が出場するので，見事に勢力図式が交代している。これは嘉義農林とその後強くなり，2 度甲子園にも出場した嘉義中学および，台湾南部に基盤を持った台湾製糖の影響であろう。ここでも，日本人のみの北部と，三民族混合の南部という図式が成立するのであろう。ただし，本大会では，台北交通団が 2 度ベスト 4 に進出したのみで，後半はほとんど初戦負けを繰り返している。企業チームが増加して，日本本土の社会人野球のレベルが向上したことが理由であろう。

お わ り に

映画の冒頭は，南方へ出征の途上，基隆港に上陸した日本軍の青年将校が，列車に乗り込む場面から始まる。続いて，この将校が，部下に，嘉義に着いたら起こしてくれと頼んで寝込むシーンがあり，この段階では何の話か，分からない仕掛けになっている。そして，かなり進行し，場面が甲子園に進んでから，この将校は準々決勝で嘉義農林と対戦して打ち込まれた札幌商業のエース錠者博美だと種明かしされる。sassyo（札商）は kano（嘉農）に 7―19 で大敗するのだが，sassyo は 2 回戦で優勝候補といわれた大連商業に打ち勝っており，マスコミ注目の南北対決という形で描かれている。だから，この投手が嘉義駅での停車時間を利用して，嘉義農林の練習場所を訪れ，感慨にふけるシーンがある。そして，kano は決勝戦で，この年から黄金時代を築き，3 連覇した中京商業に惜敗した。

負けてうなだれる kano ナインに対して，

スタンドから「天下の嘉農……」と絶叫するのが錠者投手あり，5万の大観衆を収容したスタンド全体がこれに唱和して，敗者を讃えるというこの映画のクライマックスを迎えることになる。

実は札幌商業というのは，現在校名が変わり，北海学園札幌高校となっている。男子校から男女共学に移行した時，校名も変更した。もともとは，夏の甲子園最多出場回数（松商学園と並んで35回）を誇る北海高校（当時は北海中学）の商業科が独立したもので，ともに，筆者の勤務校・北海学園大学と同法人の系列校である。台湾でこの映画を見た後，会う人ごとにsassyoを知っているかと聞いたところ，知らない人などいなかった。甲子園に夏8回春2回出場した札幌商業ならともかく，校名変更した後は，日本では，全く無名の学校が，台湾では知らない人はいない高校となっていることになる。

となれば，松山商業高校と並んで，北海学園札幌高校を，台湾野球の聖地として売り出さない手はない。別に，拝観すべき施設があるわけではないが，kano人気が冷めないうちに，何か手を打たなければならないと思っている。もちろん，本稿もその一環ではある。

日本野球の聖地といえば，高校野球の「阪神甲子園球場」がまず思い浮かぶ。学生野球の「明治神宮野球場」や都市対抗野球の「後楽園スタヂアム」をあげても良い。これまで，幾多の名選手がプレイし，観客を沸かせた特別に聖なる場所である。「後楽園スタヂアム」は現在建て変わって「東京ドーム」となっている（都市対抗野球は1938年までは，神宮球場で行われた)。野球少年はみんな，これらの球場でプレーしたいと練習に励む，あこがれの球場である。甲子園に到っては，去り際に砂をスパイクに詰めて持ち帰り，仏舎利のごとく床の間に飾って仰ぎ見られるほどである。

かつて，外地と呼ばれた朝鮮・満州・台湾にも，聖地と呼んで良い場所がいくつもあった。多くの人たちが，内地でのしがらみを逃れて思い切り野球をするために，また，希望に燃えて新天地で再起を期すため渡っていった。そして，彼らが指導し，その地で育った球児たちが，甲子園や神宮で活躍した。少なからず，プロ野球の名選手も輩出している。

本稿では，台湾映画「KANO」を手引きに，忘れ去られた歴史に光を当ててみた。朝鮮では，野球の盛んな地域は全土におよび，例えば甲子園出場校を見ても，京城中，平壌中，釜山商，大邱商など拡散している。そして，日本人とあまり関係のないケースすらある。どうしてもというなら「龍山」(現ソウル特別市龍山区）かも知れないが，野球に関して暴動があったりして，日韓反目の歴史地区でもある。

満州では，大連を日本野球の聖地と呼んで，異議を唱える人もいないだろう。都市対抗野球では，大連市が活躍し，プロ野球創設に関わった人も多く輩出した。大連商業は甲子園の強豪となった。また，プロ野球は，1940(昭和15)年夏リーグ（1シーズン制ながら，春夏秋に区切って行われた）を丸ごと満州遠征にあて，72試合を行った。しかし，残念ながらその遺跡は全く残っておらず，ここに球場があったという程度の巡礼しかできない。

その点，台湾の嘉義では，かつての球場はそのまま球場として残り，かつての嘉義農林の校舎跡は，別の学校が入っているが，2014年3月の段階では「嘉義農林学校旧址」の横断幕が掲げられていた。国立嘉義大学には記念碑が2つも建っており，本部の玄関脇には写真や記念品が飾られている。日本家屋が並んだ保存展示地区の土産物屋には，映画にちなんだKANOや呉明捷・近藤兵太郎などのグッズも揃っていた。すでに，台湾国内の巡礼者がこれらを拝観して記念写真を撮っている。あとは，KANOが日本で上映された後の，日本からの巡礼者を待つばかりである。

参 考 文 献

伊藤俊太郎編 1997『比較文明学を学ぶ人のために』世界思想社
大島裕史 2006『韓国野球の源流 ── 玄界灘のフィールド・オブ・ドリームス』新幹社
加藤英明 2013『日本と台湾 ── なぜ，両国は運命共同体なのか』祥伝社新書
小林完一編 1969『満州倶楽部野球史』満鉄会
坂上康博 2001『日本野球の系譜学』青弓社
澤野雅彦 2004『企業スポーツの栄光と挫折』青弓社
澤野雅彦 2008『姉妹都市と東アジアのスポーツ交流 ── 大連の野球を中心として ──』 中牧弘允編『産業と文化の経営人類学的研究』［平成 19 年度 ─平成 20 年度科学研究費補助金基盤研究（B）］
澤野雅彦 2014「企業の文明学 ── スポーツとの出会いと別れ」比較文明学会 30 周年記念出版編集委員会編『文明の未来』東海大学出版部